

京機会 KMC イノベーション研究会・講演会のお知らせ

KMC イノベーション研究会の研究の歩み（テーマの変遷）を振り返りますと、これまで、①科学技術イノベーション（個別テーマに関するイノベーション）、②シュムペーターやクリステンセンといった経済学・経営学におけるイノベーション理論、③地球規模でイノベーションを推進しようとするイノベーション・エコシステム（国家的、国際的イノベーション環境、構造、世界イノベーションランキングの評価指標）を経て、社会的なイノベーションが生起する人間の生命の場である地域という足元のイノベーションにテーマの方向を向けてきました。

こうしたテーマの変遷を受けて、2020 年の講演会は、「地域史に見る連携の経済」と題して、京都大学名誉教授・京都橘大学教授（地域経済学・現代日本経済史）の岡田知弘先生にご講演をお願いします。

岡田先生は、これまで、全国各地の地域調査、地域づくりへのご参画や、県史・市史のご編纂に関わってこられました。それらの知見を活かして、「地域づくりの経済学」理論を、地域内再投資力、地域内経済循環、地域住民主権をキーワードにして構築されています。

いま、多くの地域で、この理論に基づく実践的な取組が、自治体や企業、経済団体によって具体化されてきています。うち続く災害やコロナ禍、経済的な危機に際して、社会的イノベーションを持続的に行ってきた地域には、歴史に学び、地域の様々な主体（住民、企業、協同組合、NPO、自治体）による、自律的な共同の取組があることを、本講演を通して学び合いたいと思います。

☆関連ご著書 『地域づくりの経済学入門』増補改訂版、自治体研究社/『一人ひとりが輝く地域再生』新日本出版社など。



1. 開催日時 2020 年 10 月 29 日 17 時~19 時
2. 場所 大阪駅前第3ビル 25 階（咸生書院講義室）
3. 定員 30 名（申し込み先着順）
4. お申し込みは下記メールアドレスまでお願いします。

k-hayashi@geum.co.jp

京機会 KMC イノベーション研究会座長 林完爾



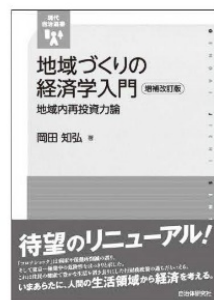
岡田知弘著

自治体研究社（本体2700円＋税）

『地域づくりの経済学入門 地域内再投資力論（増補改訂版）』

第1章 地域と地域づくり 第2章 経済のグローバル化と地域の変貌 第3章 地域社会の持続可能性の危機 第4章 戦後地域開発政策の展開と地域 第5章 プロジェクト型地域開発と地域 第6章 企業誘致で地域は豊かになるのか 第7章 地域開発から地域の持続的発展へ―地域内再投資力― 第8章 「一村一品」から地域内産業連関の構築へ 第9章 小さいからこそ輝く自治体―地方自治と地域づくりの原点を探る― 第10章 都市の「空洞化」とまちづくり 第11章 章市町村合併で地域は豊かになったのか 第12章 地域づくりと地域住民主権 ※目次は一部抜粋

評者 岩佐和幸
（高知大学人文社会
科学部教授）



2005年の公刊以来、『地域づくりの経済学入門』は全国で多くの読者を獲得し、国境を越えて韓国語にも翻訳されるなど、地域づくりに携わる国内外の人々に大きな力と希望を与えてきました。その一方で、旧版から15年が経つ中で、地域の状況は一層厳しさを増すとともに、そうした逆境を跳ね返す創造的な実践も各地で広がってきました。学界のみならず、自治体問題研究所理事長として社会運動をもリードしてきた岡田知弘氏は、この間の状況をどう捉え、理論と政策をどのように深化させてきたか。増補改訂版としてリニューアルされた本書は、まさにそうした期待に十分応えるものとなっています。

構成は、旧版同様4部12章で組み立てられ、地域づくりの分析視角と現代地域経済の全体像を土台に据えながら、地域開発政策の検証をベースに地域の持続的発展の鍵となる地域内再投資力の有効性を説明し、最後に基礎自治体・自治組織と地域住民主権の意義を主張する形で締めくくっています。総ページ数は400弱と大幅に加筆され、最新データと豊富な事例から、旧版を知る読者にも、新鮮かつ読み応えのある内容になっています。特に、小泉構造改革と「平成の大合併」の時代から、アベノミクスと「地方創生」の時代へ推移する中、地域がいつそう危機の度合いを深める過程とその対抗に鋭く斬り込んでい

るのは圧巻です。

さらに、単なるアップデートにとどまらず、新たな視点が盛り込まれているのも特徴的です。

第1に、東日本大震災から新型コロナ禍に至る「大災害の時代」における「人間の復興」の意義を、地域経済学的に論じている点です。

第2に、地域内再投資力論の深化です。単に資金循環等の価値的側面だけでなく、物質代謝に基づく素材的側面からも理論を豊富化させています。そして、人間の生活領域としての地域の視角から、地域活性化ブームで登場した諸議論を批判し、「稼ぐ力」優先の国の政策の限界を浮き彫りにしています。

第3に、各地の多様な実践例から住民学習の意義を導き出し、地域住民主権の可能性を展開している点です。

地域に入り、現場から理論を発展させ、真に有効な政策とは何かを問い続けてきた著者は、「あとがき」の中で、本書を地域づくりに取り組む友人との「共同作品」と紹介した上で、地域づくりとともに本の内容も成長してきたと振り返っています。今後、読者の皆さんが、本書を住民のための真の地域づくりのために活用しながら、著者との新たな「共同作品」づくりの輪に参画されることを、心から期待したいと思っています。